様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｈ０１６７７

研究課題名（和文）明治期図画手工教科書データベースの充実と活用に基づく教科横断的学習の史的研究

研究課題名（英文）Historical Research on Cross-curriculum Learning based on Enhancement and Utilization of the Database of Drawing Textbooks in the Meiji Period

研究代表者
赤木　里香子（Akagi, Rikako）

岡山大学・教育学域・教授

研究者番号：４０２１１６９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、明治期の図画科・手工科教科書に臨画（模写）の手本や参考図として掲載された各種の図の内容について、フリーワードで検索可能な画像データベースを作成・公開し、その全体像を問い直すことを目的とするものである。
　2018年より公開中であったサンプル版にIIIFを導入するなど、システムの基礎と方向性を定め、研究成果として2021年末、総計142タイトル、約1万点の画像データを整備した「近代日本図画手工教科書データベース」を本格稼働するに至った。また、本データベースの活用により、図画手工教科書に掲載された図が、描かれたものの名称や知識、伝統的教養や各教科の新知見と結びついていた事例を確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本データベースは、近代日本において「美術」概念の枠組がいまだ定まらない時期に、図や絵を見ること、描くことの意義がどのように捉えられていたのかを探るうえで重要な手がかりとなる。図画科・手工科のみならず、修身、国語、理科、地理・歴史、数学等の教科教育との関連も指摘できる。さらに明治期の日常生活で見られた事物や当時の美意識に触れることを可能にし、美術史、社会史、民俗学等の学術研究にも資する。
　また本データベースは、児童生徒を含む一般の人々が気軽に閲覧しイメージソースとして活用できるものであり、明治期の視覚メディアの一翼を担った図画手工教科書の豊かな世界を実感させる、社会に開かれた研究成果である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to create and publish a free-word searchable image database of the contents of various illustrations that appeared as models for copying and reference drawings in art and handicraft textbooks for primary and secondary education during the Meiji period, and to question the overall picture of these illustrations.
　The foundation and direction of the system were established by introducing IIIF to the sample version that had been available to the public since 2018, and as a result of the research, the "Modern Japanese Art and Handicraft Textbook Database" with a total of 142 titles and approximately 10,000 image data was fully operational at the end of 2021. The database has also enabled us to confirm cases in which the illustrations in the textbooks were linked to the names and knowledge of the objects depicted, traditional culture, and new findings in each subject area.

研究分野：美術教育史、美術科教育、芸術教育学

キーワード：美術教育史　図画科　手工科　教科書データベース　教科横断的学習　臨画　鉛筆画　毛筆画

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（1）本研究メンバーは平成 27～29 年度、科研費（基盤研究(B)）を受けて「明治期図画手工教科書データベース構築に向けた総合的調査研究」（課題番号：15H03502）に取り組んだ。その過程では最初に、明治期に刊行された初等・中等（一部高等教育を含む）教育機関の児童・生徒・学生向けの図画科（罫画科、画学科）および手工科用の教科書について、既存の教科書目録や収集家による私家版の目録等を総合して書誌情報をまとめ、資料の所在調査を試みた。

続いて、研究代表者・分担者の所属機関等が所蔵する資料について、デジタルカメラで撮影して高精細画像データを作成する作業に着手した。さらに、教科書 1 タイトルの全冊全頁を通覧するだけでなく、複数の教科書の図様を一覧して比較できる画像データベースの構築に向けて、専門業者と協議しながら画像データと書誌データの体系的な整理を進めた。最終的に研究成果として、平成 30 年(2018）年 3 月より「明治期図画手工教科書データベース(サンプル版）」を公開し、研究代表者・分担者による論考 4 編と資料編として 12 タイトル分の「主要図画教科書図像総覧」や「明治期図画手工教科書目録」を含む報告書を刊行することができた。

この段階では、ひとまずプラットフォームを完成させることを最優先し、データベースの試験的運用を開始するところまでを計画していた。したがって具体的目標は十分達成されたと言える。ただし、サンプル版の収録タイトル数は 22 と極めて限られており、本格的なデータベースの構築と公開は将来の課題として残されていた。

（2）このような経緯から、上記の研究を第一期と位置づけ、第二期に相当する継続的な研究を計画した。平成 30 年度から準備したこの計画が、本研究の開始につながっている。

研究分担者金子によれば､明治 19 年(1886)の検定制度導入以前の教科書タイトルはおよそ 150､検定制度下で明治期に刊行されたタイトルがおよそ 580､そこに多種刊行された国定教科書が加わり、膨大な数量となる。そのすべてを収録するには相当の時間を要すると想像されるが、収録タイトル数をできる限り増やすことは、実現可能な喫緊の課題である。また、収録タイトル数を増やし、画像データ数を充実させることで、フリーワードで検索して複数タイトルの図様を一覧できるという本データベースの独自性も打ち出せるであろう。この状態に至ることを第二期における本データベースの完成とみて、具体的な目標や方法の検討に入った。

以上のような継続的な取り組みに加えて、他の画像データベースやデジタルアーカイブとの連動に向けて、汎用性の高いシステムを導入することも検討課題として浮上した。具体的には、後述するように IIIF への対応を視野に入れながら、令和元年度より本研究の活動を開始した。

２．研究の目的

（1）本研究の第一の目的は、第一期の研究に引き続き、明治期図画手工教科書データベースの構築を行い、本格稼働により恒常的な公開を実現することである。そのために、サンプル版データベースに新規データを加えて情報量を充実させるとともに、臨画（模写）の手本ないし参考図として掲載された各種の図について、その内容を総覧するだけでなく、キーワードで検索し、複数タイトルの図を比較できるシステムを改良する。また他機関との連動の可能性を模索する。

本研究の主眼であるデータベース構築は、ややもすると機械的な集積のみによるものと誤解されがちである。しかし実際には、対象となる資料に関する調査研究の成果を踏まえ、データ処理の過程で得られた新知見を総合した、資料ないし調査研究そのものに対する思想を背景とするものである。このような観点から、データベース構築の過程や考え方についても、研究成果としての意義を見出したい。

（2）本研究のもう一つの目的は、本データベースの活用によって、「美術」概念の枠組がいまだ定まらない時期に、図や絵を見ること、描くことの意義がどのように捉えられていたかを明らかにし、美術教育の成立過程を掘り下げて理解する道を拓くことである。それによって、これまでとは異なる角度から、明治期図画手工教科書の全体像を問い直すことができるだろう。

図画手工教科書に掲載された各種の図は、単なる手本としてではなく、児童生徒の日常生活や他教科の学習内容と結びつくものとして選ばれたと考えられる。特に、先行研究においても指摘されてきた以下のような特質に着目する。

①図の選択は、ものの名称と知識に関わる言語活動と結びつく場合がある。
②図の選択は、直線・曲線や幾何学的図形に関わる算数的活動に関連する場合がある。
③図の選択は、歴史・地理や古典的・伝統的教養と結びつく場合がある。
④鉛筆画教科書に掲載された図は、明治 10 年半ばから 20 年代にかけて、博物学的体系による配列から児童の身近なものを中心とする配列に変化した。
⑤毛筆画教科書に掲載された図は、明治 20 年代から 30 年代にかけて、ものの形を正確に描くことを重んじるものと、筆意や筆運びを重んじるものとに傾向が分かれた。

これらの仮説については、本データベースが構築され収録タイトル数が増加するとともに実証できる事例が集まり、より強固に論証されるものと期待される。

３．研究の方法

（1）試験的運用にとどまっていたサンプル版から、3 か年の研究計画の最終段階でデータベースの完成に至るには、初年度の令和元年度からデータ整備作業を確実に進め、令和 2 年度にデータベース拡充のベースメントとなるようなシステムの構築を試みることが重要である。

これを踏まえて、令和 3 年度までに継続してデータを増やしつつ微調整を重ね、令和 3 年夏ごろに完成版の公開に進み、その後、報告書の作成に入るという作業スケジュールを立てた。令和元年 5 月には東京都千代田区、7 月には島根県松江市において研究代表者・分担者全員による打ち合わせを実施し、研究の目的および具体的な目標の検討とスケジュール確認を行った。

研究分担者角田は、神奈川県立歴史博物館所蔵の橘忠助氏旧蔵美術資料群に含まれる図画教科書を中心とする約 70 タイトルについて、撮影したデジタル画像をトリミングし、画像 1 件ごとに Excel ファイルに「書名」「著者・編者・校閲者・監修者」「発行社／発行者」「出版年月日」等の書誌データを入力する作業を進めており、この方向性を確認するとともに、掲載された図に「何が描かれているか」に着目してグループ化するうえでは、なんらかの分類項目を定める必要があることを指摘した。

検討の結果、研究分担者金子のアドバイスにより、明治 14 年（1881）の小学校教則綱領に示された小学中等科・小学高等科の図画科の内容に基づいて、「直線」「曲線」「単形」「紋画」「器具」「花葉」「家屋」「草木」「禽獣」「虫魚」「山水」「幾何画」という大きな分類を手がかりとすることに決定した。これに「人物」と、いずれにも分類し難い「そのほか」、出版物であれば備わっているはずの「表紙」「序文凡例」「奥付」を加え、本データベースに収録されるすべての図が、これらの項目のいずれかに分類されるようにすることを決定した。

（2）大まかに分類されたグループから、さらに詳細に図の内容を調査しようとする際の手がかりとなるよう、各図に「何が描かれているか」すなわち画像から読み取れる情報を言語テキスト化して「キーワード」とし、図に紐づけることが本研究におけるデータベースの特徴である。しかし、この「キーワード」入力作業の時点で、入力者により言語テキスト化した入力内容に異同・差異が生じることが当初から想定された。

データベース構築を担当した角田は、第一期のサンプル版作成時より 7 年にわたって、この“揺れ”を課題としてきた。雇用した学生が入力作業を行った場合などに、角田がデータ全体に目を通し、統一の必要性などを検討し続け、修正を行った例もある。しかし、最終的には必要以上の統一をとらないこととし、一定の幅を許容することで、利用者が自由に設定する「キーワード」がよりヒットしやすくなる可能性を重視した。

また、角田が本データベース構築にあたってもうひとつ重要なポイントとしたのが、階層構造である。本研究の対象である図画手工教科書という存在は、「図書」でもあり、美術館や博物館で扱われる「資料」でもある。「図書」であれば、階層構造の最小単位は教科書各冊であろう。しかし、本研究で目指すのは、教科書に収められた各図を総覧し全体像を捉えるとともに、複数タイトルの図の比較研究等を実践することである。したがって本データベースにおいては階層構造の最小単位は教科書の各頁に掲載された図の画像そのものとなり、これを「資料」として扱うことになった。

その結果、特に明治初期に地方翻刻版が多数出版された鉛筆画教科書に関して、「異版」の存在を示せるという特長を、本データベースに装備することが叶った。

（3）令和元年 7 月の打合せにおける協議の結果、今後のシステム改修にあたっては、デジタル画像を相互運用するための国際的な枠組みである IIIF を導入することとなった。IIIF は世界的に有力なデジタルアーカイブにおいて標準化しつつある規格である。各地で公開が始まっている多様な画像データベースと関連づけ、画像を比較できるように拡大縮小することや並べて表示することが将来的に可能となるであろう。

以上のような方策によって、バージョンアップを終えた明治期図画手工教科書データベースの恒常的公開を、令和 3 年度以内に開始することを目指した。これと並行して本データベースの活用によって、明治期図画手工教科書に現れる絵や図がどのような意味を持っていたのか、どのような教育目的と結びついていたのか、新たな視点から問い直すことを試みた。

（4）残念ながらコロナ禍により、令和元年度末以降、データ入力のための複数の学生雇用が不可能となり、しばらく再開できず作業進展は大幅に遅延した。他機関での調査や連携も先延ばしとなった、また、第一期に進めていた国際的な研究交流についても、ドイツほか海外の研究者を招いてのシンポジウム開催等は早くから断念せざるを得なかった。

コロナ禍が継続するなか、令和 2 年度には、データベースの収録データ数を増大させることよりも、システム改善によってその機能の充実に努めることに集中するという方向性を定め、上記（2）の取組みに注力した。角田を中心にデータ整備を継続し、令和 3 年度には神奈川歴博にて、規模は縮小したが展示公開も行い、教員向けワークショップを行うなどの活動にも取り組んだ。

４．研究成果

（1）令和 3 年 12 月、株式会社 ENU Technologies に委託して組み上がったデータベースのシス

テムを岡山大学のホスティング・サーバーに移し、「近代日本図画手工教科書データベース」を恒常的に公開するに至った（http://dista.ccsv.okayama-u.ac.jp）。本格稼働に際して名称を変更したのは、明治期のみならず大正・昭和戦前期の図画手工教科書のデータも加えたためである。

完成版には、研究代表者・分担者の所属機関である神奈川県立歴史博物館、岡山大学が所蔵する資料を中心に新規データを投入し、総計 142 タイトル、約 1 万点の画像データを整備することができた。とはいえ、現状の収録データ量は想定される全体像の五分の一弱にとどまっている。問題点としては、現行システムの検索性および収録点数などに限界があること、所蔵先の特性により手工関係のデータが少ないといった偏りがあることが挙げられる。また「キーワード」の入力における“揺れ”については、第二期の段階では一定の範囲で許容することとしたが、モニターを募集し、意見を集約するなどの作業を経て、解決方法を探っていきたい。

このデータベースを活用し、美術科教育のみならず教科横断的な学習についての研究成果を公表し得たかといえば、不十分である。今後は第三期としてデータ収集と整備を継続し、調査研究と成果公開につなげる予定である。

（2）「近代日本図画手工教科書データベース」の特徴を以下に挙げる。

①タブ表示による簡便性

「キーワード」「分類」「人名等」「ピックアップ」「目録／時代区分」とカテゴリを設け、トップページでタブ表示にすることで、利用中に「使い方」を参照する、あるいは検索窓に戻れるようにしてある。それぞれのタブは検索補助の役割も果たし、どのような「キーワード」があるのか、著者や発行者としてどのような人物がいるのか等を、一覧で示すものである。

②図（画像データ）と書誌事項の紐づけ

教科書の 1 頁ないし見開き 2 頁を画像データとし、それぞれの図について詳細なデータ、たとえば「書名」「著者名」「発行年月日」「発行者」などを収録し、いずれも画像と共にセットで確認できる。

③横断的検索機能

図（画像データ）に「キーワード」を付しており、複数の教科書を横断検索することが可能である。検索窓に、「分類」よりもさらに細かいキーワード、たとえば「虫魚」の分類を参照して、虫ならば蝶、魚であれば鯛といったキーワードを入れて検索することで、複数の教科書のなかの図がヒットし、一覧できるようになっている。

④IIIF の導入

一覧のなかの各画像を選んでクリックすることで、画像が拡大され、その画像の詳細情報と、その画像が含まれている教科書へと遷移する。「Viewer」のアイコンをクリックして現れる黒いバックの画面では、教科書 1 冊ずつをめくっていくように見ることができる。これは国立国会図書館などで採用されている IIIF のシステムであり、各画像を回転、拡大することもできる。

(3)研究成果の公開に関しては、以下に挙げる。

①令和 2 年 4 月には、角田が所属する神奈川県立歴史博物館で開催予定の展覧会において図画手工教科書の展示を通じた研究成果公開を計画していたが、コロナ禍により開催中止となり、その機会は失われた。しかし、同館が「＃おうちでかながわけんぱく」の名称で複数プログラムを設けてオンラインで発信する企画を決定したことを受け、角田が本研究の成果の一般発信として、主に中高生を対象に、図画教科書の階梯をおおよそふまえて絵の描き方を学ぶという web コンテンツを同館企画普及課との共同制作で開発・公開し、twitter でも配信を行った。

角田が非常勤講師を務める複数大学の学生に閲覧・感想を求めたところ、好意的な意見も否定的な意見もあったが、明治期図画教科書の存在を知らない彼らには刺激的な内容であったと感じられた。

②令和 2 年 9 月 5 日から 11 月 29 日にかけて、岡山県の高梁市成羽美術館において開催された児島虎次郎没後 90 年記念「白馬のゆくえ―近代日本洋画の黎明」展では、岡山大学および研究代表者赤木が所蔵する、白馬会関連の画家たちが著した図画教科書や同時代の国定図画教科書等 21 点を展示した。

10 月 25 日には記念講演会として赤木が「洋画家たちの学びと歩み―美術教育との関わりを中心に」と題する講演を行い、國光社編纂・小林萬吾画『小學習画帖』全 8 巻（國光社、1899 年）に見られる教科横断的内容について指摘した。國光社が読本、修身、歴史・地理等の教科書を出版していたことも関連すると思われる。

③令和 2 年度末の令和 3 年 3 月 27・28 日にオンラインで開催された第 43 回美術科教育学会愛媛大会において、研究メンバー全員の名義で中間発表を行い、データベースのシステム改善の方向性について報告し、美術教育史研究に活用できる事例を報告した。明治期の子供や青少年の作品が臨画によるものである場合，本データベースの活用によって，モチーフから手本となった教

科書を探し出せる可能性がある。
　本研究では、岡山市出身の小説家・随筆家として知られる内田百閒（1889－1971）の少年時代の図画科作品から、百閒が 1898（明治 31）年に入学したと考えられる岡山高等小学校（４年制）で使用した毛筆画教科書が、1892（明治 25）年に発行された渡部勉吾編『小学毛筆図画帖』であることを明らかにした。洋画家の国吉康雄（1889-1953）、坂田一男（1889-1956）も岡山生まれで岡山高等小学校出身であることから、彼らの学習環境には共通する点があったと推測される。

④当初予定より大幅に規模は縮小したが、角田によって神奈川県立歴史博物館で図画教科書の展示公開が実施された(トピック展示「横浜美術史 Ⅳ 五姓田義松」 令和 3 年 9 月 1 日～12 月 3 日)。また、令和 3 年度神奈川県教育委員会社会体験研修のプログラムとして、神奈川県立の高等学校教員を対象に、実際の教科書とデータベースを見比べて教育現場での活用実践を検討するワークショップも開催した(令和 3 年 8 月 8 日)。参加者からは、絵を順序だててステップアップしながら学ぶことの新鮮さ、生徒が興味の赴くままデータベースを利用できる可能性などが指摘された。今後の教育現場での利活用、プログラム開発も期待できる。

⑤上記（1)、(2）の研究成果を踏まえて、令和 3 年 9 月 4 日に明治美術学会第 3 回例会で角田が「明治期図画手工教科書データベースの構築と活用」と題して発表し、完成版のデータベースを初めて公開し、実演しながらその特徴を明らかにした。令和 4 年 3 月 6 日には、第 44 回美術科教育学会東京大会（オンライン）で、研究メンバー全員の名義で「近代日本図画手工教科書データベースの充実と活用に基づいた美術教育史研究の可能性と課題」と題して赤木が発表を行った。いずれも本研究の最終年度にあたって、研究の総括を行うものであった。

⑥令和 3 年度末、本研究に関して全 90 頁の研究成果報告書を刊行した。内容は、調査研究概要、研究成果の概要、上記（2）についてまとめた角田拓郎「データベース構築に関する覚え書き」（7－15 頁）のほか、書き下ろしの論考として、金子一夫「宮本三平編『小学普通画学本』文部省刊行原本に関する考察―国立教育政策研究所教育図書館所蔵本を中心に―」（48－56 頁)、角田拓朗「明治期図画手工教育の地方実状―市村才吉郎を事例として―」（56－76 頁）を含む。
　また、上記②の赤木の講演録と、赤木と研究分担者山口が第一期の研究期間中の 2016 年 10 月末にドイツで行われた国際シンポジウム Drawing Education Worldwide! に参加した後、依頼を受けて執筆し、2019 年に刊行された書籍に掲載された論文を再録した。

　以上のように主な研究成果を挙げたが、2. 研究目的の（2）に掲げた仮説については、断片的に事例を紹介したのみで、強固な論証には至っていない。多くの課題が山積していることは確かであろう。ただ、第二期となる本研究によって、「近代日本図画手工教科書データベース」がひとまず完成し、将来へつながる基礎的な活動となり得たことは最大の成果であったと、我々自身は自己評価している。
　本データベースは、美術教育の歴史的展開を跡付けるのに役立つだけでなく、美術が他分野にも深い関わりを持ち、人文科学や自然科学へとひろくつながる可能性をも示唆している。より多くの人々に気軽に図画手工教科書の幅広い世界に触れてもらい、その面白さを味わってもらえることを大きな目的としながら、研究を継続していきたい。

　最後になりますが、本データベース作成ならびに本調査研究にご協力いただきました機関、個人の皆様に、厚く御礼申し上げます。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 角田拓朗	４．巻 1527
２．論文標題 《大蔵孫兵衛旧蔵錦絵画帖》の史的位置	５．発行年 2022年
３．雑誌名 国華	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 金子　一夫	４．巻 29
２．論文標題 山本鼎の生いたち　付論　国柱会との関わり	５．発行年 2020年
３．雑誌名 近代画説	６．最初と最後の頁 4-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 赤木里香子、山口健二、金子一夫、角田拓朗	４．巻 -
２．論文標題 「明治期図画手工教科書データベースの活用による史的研究の可能性」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『美術科教育学会千葉大会　研究発表予稿集』	６．最初と最後の頁 67-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 金子一夫	４．巻 -
２．論文標題 「山本鼎の生いたち、そして国柱会」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『農民美術・児童自由画100年展』（農民美術・児童自由画100周年記念事業実行委員会）	６．最初と最後の頁 114-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 金子一夫	4．巻 第41号
2．論文標題 「美術教育学における贈与交換システムの複合的構造―参照源の構造、及び 学習者間交換―」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『美術教育学』（美術科教育学会誌）	6．最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金子一夫	4．巻 第79号
2．論文標題 「大正期・昭和戦前期中等学校の図画教員10 福島県」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『一寸』	6．最初と最後の頁 50-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金子一夫	4．巻 第80号
2．論文標題 「大正期・昭和戦前期中等学校の図画教員11 岐阜県」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『一寸』	6．最初と最後の頁 54-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金子一夫	4．巻 第81号
2．論文標題 「山本鼎研究拾遺―村山谷助、桜井寅吉のことなど」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『一寸』	6．最初と最後の頁 50-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金子一夫	4．巻 -
2．論文標題 「美術と教育　全国リサーチプロジェクトに寄せて―美術専門と美術教育専門の間」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『美術と教育　全国リサーチプロジェクト2019 こんな授業を受けてみたい！　報告書』（美術と教育　全国リサーチプロジェクト事務局）	6．最初と最後の頁 232-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 角田　拓朗
2．発表標題 《大蔵孫兵衛旧蔵錦絵画帖》の史的位置
3．学会等名 美術史学会東支部例会（オンライン）
4．発表年 2021年

1．発表者名 角田　拓朗
2．発表標題 明治期図画手工教科書データベースの構築と活用
3．学会等名 明治美術学会　例会　（オンライン）
4．発表年 2021年

1．発表者名 赤木里香子、角田拓朗、金子一夫、山口健二
2．発表標題 近代日本図画手工教科書データベースの充実と活用に基づいた美術教育史研究の可能性と課題
3．学会等名 第44回 美術科教育学会 東京大会 （オンライン）
4．発表年 2022年

１．発表者名 赤木里香子、角田拓朗、金子一夫、山口健二
２．発表標題 明治期図画手工教科書データベースの活用による史的研究の可能性
３．学会等名 第43回 美術科教育学会 愛媛大会（オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 赤木里香子
２．発表標題 洋画家たちの歩みと学び―美術教育との関わりを中心に
３．学会等名 児島虎次郎没後90年記念「白馬のゆくえ―近代日本洋画の黎明」記念講演会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 金子一夫
２．発表標題 「戦前期全国中等学校図画教員の総覧的研究―岐阜県」
３．学会等名 第58回大学美術教育学会岐阜大会（於：岐阜大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 金子一夫
２．発表標題 「山本鼎の生いたち―新資料による解明、そして国柱会のこと」
３．学会等名 明治美術学会（於：早稲田大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 金子一夫
２．発表標題 「山本鼎の生いたち、そして国柱会」
３．学会等名 講演会：農民美術児童自由画運動と美術教育（於：上田市立美術館）招待講演（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 赤木里香子、角田拓朗、金子一夫、山口健二	４．発行年 2022年
２．出版社 岡山大学赤木研究室、神奈川県立歴史博物館	５．総ページ数 90頁
３．書名 科学研究費研究成果報告書　令和元～三年度(2019～2021)　基盤研究(B)　明治期図画手工教科書データベースの充実と活用に基づく教科横断的学習の史的研究	

１．著者名 Akagi Rikako & Yamaguchi Kenji	４．発行年 2019年
２．出版社 Heidelberg University Publishing	５．総ページ数 20/326
３．書名 The Evolution of Drawing Education in Modern Japan: The Impact of Traditional and Introduced Methods on the Artworks of Elementary Students in the Meiji Era, in: Nino Nanobashvili & Tobias Teutenberg(Eds.),: Drawing Education: Worldwide! Continuities -Transfers - Mixtures	

〔産業財産権〕

〔その他〕

近代日本図画手工教科書データベース
http://dista.ccsv.okayama-u.ac.jp/ja

絵が上手くなる！
（神奈川県立歴史博物館HP内 特設サイト「おうちでかながわけんぱく」）
https://ch.kanagawa-museum.jp/ouchi/egaumakunaru

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	金子　一夫 (Kaneko Kazuo) (70114014)	茨城大学・教育学部・名誉教授 (12101)	
研究分担者	角田　拓朗 (Tsunoda Takuro) (80435825)	神奈川県立歴史博物館・学芸部・主任学芸員 (82702)	
研究分担者	山口　健二 (Yamaguchi Kenji) (90273424)	岡山大学・教育学域・教授 (15301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関